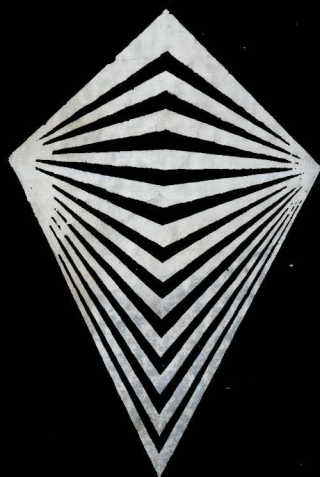
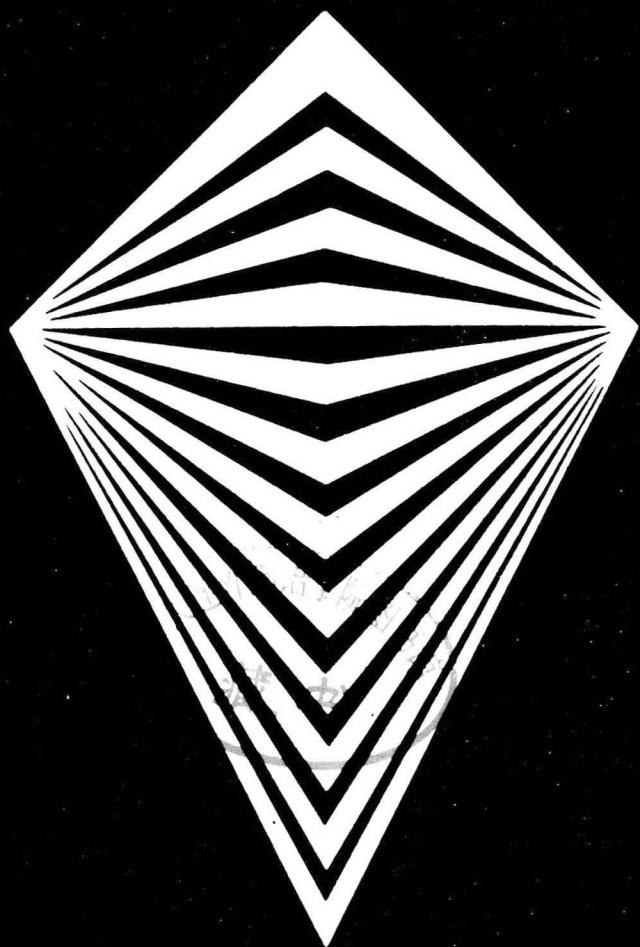




フリーマン
ウォーレス



訳者紹介

長谷川修二

1903年東京に生まる

ウッドハウス選集二巻外訳業多数あり

佐藤祥三

1907年広島に生まる

東京外語修

フリーマンの訳等多数あり

訳者の了
解を得て
検印廃止

世界推理小説大系第14巻

ウォーレス・フリーマン

定価 560 円

昭和38年8月3日第1刷

著者

E. A. ウォーレン

訳者

長谷川修二

発行者

西村俊成

印刷所

豊国印刷株式会社

製本所

藤沢製本株式会社

発行所

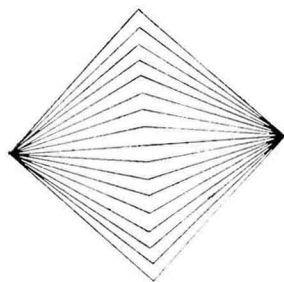
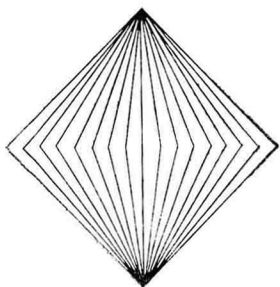
東京都文京区音羽町3-19

電話 (941) 3111

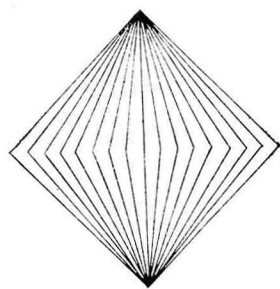
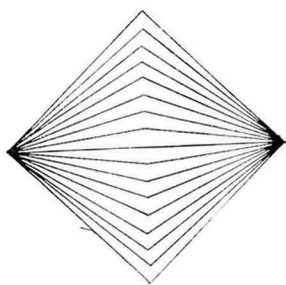
振替東京 72732

落丁本・乱丁本はおとりかえします

ウォーレス
正義の四人 5

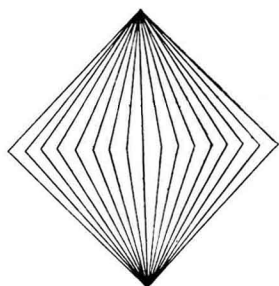


目次



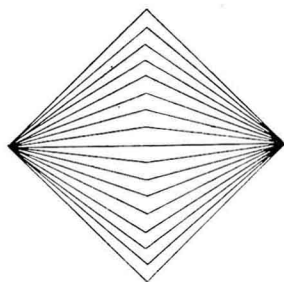
フリーマン
ソーンダイク博士集87

解説＝荒正人



正義の四人

長谷川修二訳



正義の四人

ばなのである。

ちょうど、飢饉の年の夏も末つきた、四人の男がこのテーブルの一つをかこんで坐つて、用談をしていた。

一人はレオン・ゴンサレス、もう一人はボワカール、三人目の目立つのはジョージ・マンフレッドで、テリー（別名セーモン）というのが四人目であった。この四人組のうち、現代史を研究している人には、テリーだけは紹介の必要がないであらう。公務局に行つてみれば、彼は記録にのつてゐる。テリー、別名セーモンとして、登録してあるのだ。

好奇心の強い人なら、必要な許可を受ければ、十八通りの位置から写した写真を見せてもらえるであらう——両手を広い胸に当てたポーズ、顔の大写真、三日月ひげを剃らない姿、横顔、それから——だが、何も十八通りをみんな列挙することもあるまい。

彼の耳の写真も——それも極く醜惡な、粘土の塊りのような耳なのだが——あるし、彼の生涯を詳しく記したのものもある。フィレンツェの国立人類学博物館の館長バオロ・モンテガッツァ氏は、彼の名著の中に入れるという名誉をテリーに与えている（顔の智力価

値」の章を見よ）。筆者がおよそ犯罪学と人相学を研究した人にはテリーを紹介する必要はないと説くゆえんは、これなのである。

小さいテーブルに向つて坐つてはいるものの、明らかに落着かない様子で、ズングリした顔をつまんだり、太い肩を撫でたり、ひげをのばした顎に白く残る傷跡をいじつたり、そんなことばかりしている。これは、すべて、下層階級の人間が自分よりすぐれた人々と同等の立場に置かれた時にする仕草なのである。

なぜなら、淡青い目をして、両手を始終動かすゴンサレスも、大きな図体で、ムツツリ構えて、疑い深そうなボワカールも、白いものの混つた顎ひげを蓄えて片眼鏡をかけているジョージ・マンフレッドも、犯罪社会ではそう名前こそ売れていなければ、やがて分ることだが、それぞれ大物なのであった。

マンフレッドは『マドリッド新聞』を下に置き、眼鏡をはずすと、一点の汚れもないハンケチで拭いながら、物静かに笑つた。「このロシア人たちは馴れだなあ」と、彼は言つた。

ボワカールは苦々しげな面持で新聞に手をのばした。「誰だね——今度は？」

発端 テリーの商売

ミーナ広場を後にして、合衆国領事館の大きな旗が十時から四時までダランと垂れてゐる幅の狭い通りを下り、聖母教会の脇にフランス・ホテルが正面を向けてゐる広場を抜けると、小綺麗な狭い道路になり、これがカーデイス大通りなのだが、それに沿つて行くと、諸国民カフェにさしかかる。

五時ごろだと、柱で飾つた広い大広間にはほとんど客がいななし、扉の外の歩道を邪魔している小さい丸テーブルもたいしては空つ

「南部のある県の知事だ」

「殺したのか？」

マンフレッドの口ひげが冷笑にゆがんだ。

「呆れた！ たった一人を殺すのに爆弾を使う奴があるものか！ そう、そう。成功したこともある——だが、不手際だぜ、原始的だぜ。まるで市の城壁の根元を掘って、それが崩れば——ほかの連中と一緒に——敵も死ぬだろう、というのと同じ伝^でだ」

ボワカールは電報を慎重に、ゆっくり、彼一流のやり方で読んでいた。

「大公は重傷を負い、暗殺未遂犯は片腕を失った」と彼は口に出して言って、不満げに唇をすばめた。いつもジツとしていないゴンサーレスの手が、神経質に開いて閉じたが、これはレオンの心配している印しである。

「この、われらの友人は」——マンフレッドはゴンサーレスのほうへ頭をしゃくって、笑った。「われらの友は良心を持っています——」

「一度だけだよ」レオンは早口に遮った。「しかも、私の希望でやったのでなかったのは、覚えているだろ、マンフレッド。君も、ね、ボワカール——彼はテリーには話しかけなかった——「私は、やめるように忠告し

たんだ。覚えているだろう？」彼は言外の弾劾に対して弁解したくてたまらない様子だった。「あれはホンの狭くチップケなものだった

が、私がマドリードにちようどいた時に」彼は息をつがないで言葉をつづけた。「やって来たのが、バルセローナの或る工場の若い連中だ。これからしようという計画を話し、私は彼らが化学の法則の初歩も知らないのに恐れをなした。私は成分と比例を書いたものを、彼らに頼みこんだ。そら、膝をつかん

ばかりにして、何かほかの方法を使うように頼んだ。『若い諸君』と私は言った。「君たちは本物の化学者ですら扱うのを怖がっているような物をオモチャにしようとしている。もしその工場の持主が悪い男のなら、是非とり除きたまえ。ピストルで射ちたまえ。その男が食事をすまして、身体^{からだ}の動きがゆるく鈍くなるまで待っていて、そこで右手で要求書をつきつけながら——左の手を——こう！」

レオンは固めた拳を、目の前の仮空の迫害者めがけて突き出し、また突きあげた。「でも、その連中は、私の言うことに何一つ耳を

かそうとしなかったのだ」

マンフレッドは脇のさきにあつた、クリーマ状の液体のはいったグラスを揺り動かし、

灰色の目を面白そうに光らせながら、頷いた。

「私の思い出す所では——何人かが死んで、裁判の時の、爆発物に対する専門家側の証人の筆頭は、その爆弾が向けられていた当の本人だったつけ」

テリーが何か言おうとするかのように、咳ばらいをしたので、三人は不思議そうな面持で彼を眺めた。テリーの声には怒った調子があった。

「私は自分があなたがたのような偉い人間だとは言いませんよ。旦那がた。あなたがたの言っておいでの話も、実は半分は分らないんだ——あなたがたは、政府だの王様だの憲法だの大義だのとおっしゃる。もし誰かが私を痛めつけるなら、私はその男の頭を叩き割りますね——彼は、ためらった——「私はどういふふうに言っているか分らないが……つまり、こういう意味です……その、あなたがたは憎んでもいないのに人を殺す。あなたがたを痛めつけもしない人々を、ね。その点、私のやりかたと違っていて……」彼は、ここでまた口ごもって、考えをまとめようとして、往來の真中をジツと見つめ、首を振ると、また黙ってしまった。

ほかの連中は彼を眺めていたが、やがてお互いに顔を見合わせると、微笑した。マンフレッドはポケットから嵩ばったケースを出し、巻きかたの緩い巻たばこを一本引き抜き、器用な手つきで巻き直すと、政府製造のマッチを靴の底で点けた。

「君の、流儀は、テリー——彼は煙を吐いた——「愚か者の流儀なんだ。君は儲けたから殺す。私たちは正義のために殺すのだから、おのずと只の殺し屋どもとは違つて来るのだ。不正な人間が仲間を圧迫しているのを見たり、邪まな企てが行なわれて、神の御名が汚されたり——ここでテリーは胸に十字をきつた——「人間が悩まされたりするのを見て、また人間の作つた法律ではこの悪人を罰し得ないことを知ると——私たちがそれを罰するのだ」

「ききたまえ」無口のボワカールが途中から割りこんだ。「以前、若くて器量よしの娘が、あつちにいたんだぜ——彼は本能的にためらわずに北の方角に手を振つた。——「それから、牧師がいた——牧師だ、わかるね——それから両親は、ありふれた事だからと思つて、見ない振りをしていた……だが、娘は気色が悪く、恥かしくて堪らないので、二度目

は厭だと言つたので、牧師は欺して一軒の家にかこつて置いて、その挙句、娘の容色がおとろえると、途端に抛り出してしまった所を、私がみつけたのだった。その娘は、私に取つては何でもなかったのだが、私は言つた。『この罪は法律では充分につぐなわせ得ない』で、ある晩、私は帽子を目深く冠つて

牧師の所を訪ねて、旅人が死にかけているから見舞つてくれないか、と言つた。こんな事では来る男ではないのだが、私はその死にかけている男は金持で偉い男なのだ、と言つてやつた。牧師は私の引いて行つた馬に乗り、私たちは山の中の小さな家まで飛ばして行つたが……私が入口の扉に錠をおろすと、牧師は振りかへつた——そうか！ 罌にかけてやつたのだが、牧師は気がついた。『一体何をやる積りじゃ』と、牧師は息をはずませて喚き立てた。『あなたを殺すんですよ』と私は言つてやつたが、牧師は私が本気なのを見てとつた。私はその娘の話をしてやつた……牧師は、私が一步進み出ると、大声で喚いたが、喚いたって何にもなる事ではなかった。『牧師を呼んでもらいたい』とこの牧師が頼みこむので、私は渡してやつたのだよ——鏡を」

ボワカールは話をやめて、コーヒーを啜り始めた。

「次の日、この牧師が往来に倒れているのを見がみつけたが、何で死んだのか手がかりは何一つ見当たらなかったんだ」と、彼は簡単に話した。

「死因は？」テリーは熱心に身体を前にかがめたけれど、ボワカールはただ気味の悪い微笑を一つ洩らしただけで、何も答えなかった。

テリーは眉をひそめ、疑い深い目つきで一人一人見つめた。

「もし、あなたがたが口で言うように殺せるのなら、なぜ私なんかを呼んだんです？ 私やヘレーズで、倅せだった……葡萄酒工場に働いて……あすこに娘つ子がいて……ホアン・サマーレスと呼ばれていてね」彼は額をハンケチで拭いて、急いで一人一人の顔を眺めた。「私や、あなたがたの手紙をもらった時、殺してやりたいと思つたね——あなたがたが誰だろうと——おわかりかね、私や倅せだったんだ……それに娘つ児がいて——私の忘れていた昔の暮らしかたが——」

マンフレッドが彼の支離滅裂な抗議を制した。

「ききたまえ」彼は命令的に言った。「君は何の為だの、何故だのと質問する立場ではないんだ。私たちは君の素性も過去もみんな知っている。警察が知っているよりもっと知っているのだから、絞首台に送ろうと思えば送れるのだ」

ボワカールは、その通りだと言うふうに頷き、ゴンサーレスは不思議そうにテリーを見つめた。彼は人間の性質を研究していたから、そうしたのかも知れない。

「私たちは第四の人間が欲しいのだ」マンフレッドがつづけた。「或る仕事をしたいのでね。正義を実行するという以外の欲に駆られない人間が欲しかったのだ。それがみつからなかったらば、私たちは犯罪人を是非探し出す必要があった。何なら、人殺しと言いたい所だが」

テリーは何か言おうとするように、口をあけて、また閉めた。

「私たちを裏切るような事をしたら、一言のもとに絞首台に追いやれるような男だな。君がお誂えむきなのだ。君は何の危険を冒さなくていい。報酬は充分に出す。君には人を殺してくれと頼むのではないのだけ。ききたまえ」マンフレッドは、テリーが何か言おうと

して口を開けたので、つづけた。「君は英国を知っているかね？ 君は知らないね。君はジブロールタを知っているかね？ ね、あそこ同じ国なんだ。あっちのほうにある国だがね——マンフレッドの表情豊かな両手が北を指した——「奇妙な、退屈な国で、奇妙な退屈な人間が住んでいる。一人の男がいて、それは政府の一員で、それから政府が耳にした事もない人たちがいる。君はガルシール・ガルシヤだ、例のカル主義運動の。あの男が英国に来ている。あの男が安全に住める国はあすこだけなんだ。英国から、彼はこの国の運動を指揮している。あの大運動をね。君は私の言っている事がわかるかね？」

テリーは頷いた。

「今年も、昨年と同じく、飢饉で、人は教会の入口のまわりに倒れ、公共の広場で飢死している。人民は腐敗した政府が、腐敗した政府の後継ぎになるのを見た。何百万の金が公共の金庫から流れ出て政治屋どもの懐にはいるのを見た。今年は何か起こるだろう。古い制度は倒れるに相違ない。政府はこれを知っている。政府は危険がどこにあるか知っているし、反乱の組織が完成する前にガルシヤ

が自分たちの手に引渡されない限り、どうにもならない事を知っている。だが、今の所ガルシヤは安全だし、今後もずっと安全でいられるはずだったのだが、折も折とて、英国政府の一人が或る法案を提出して、それを可決させて法律にしようとしている。それが可決されれば、ガルシヤはもう死んでも同じなのだ。私たちはそれを断じて法律にさせたくないのだが、是非君に手つだってもらいたいのだ。それで君を呼んだのだ」

テリーは臍に落ちない顔をした。「でも、どういう風に？」彼は吃^{ども}った。

マンフレッドはポケットから紙をひっぱり出してテリーに渡した。「これは、たしか」彼はゆっくり言った。「警察が出した君の人の相書の正確な写しのはずだが」テリーは頷いた。マンフレッドは身体をかがめて、書類の半分あたりにある一語を指さして、「これは君の商売なのかね？」ときいた。

テリーは弱った顔つきをした。「そうですよ」と彼は答えた。

「君はこの商売についてなら、本当に何でも知っているのかね？」マンフレッドは真面目にきいた。ほかの二人は返事をきき落すまいと、前に身体を乗り出した。

「知ってますよ」テリーはゆっくり言った。

「何から何まで知ってます。もし私が——間違ひさえやらなかったら、うんと金を儲けていたかも知れないんだ」

マンフレッドは安心の溜息をはくと、二人の仲間に目で合図した。

「では」と彼は元気のいい声を出した。「例の英国の大臣は確実に殺せる」

第一章 新聞記事

一九〇×年八月の十四日、ロンドンの一番穩健な一新聞の、ある重要でないページの下の隅に小さい記事が出たが、その要旨は外務大臣は相当の数の脅迫状を受取ったので、まことに怒って、脅迫者の逮捕と投獄の手がかりになるような情報を提供する人には、何人を問わず、五十ポンドの賞金を払う用意がある、というのだった。ロンドン切つての穩健な新聞を読んだ少数の人々は、重苦しいアテーナイオム・クラブ式の見識から、大臣が何が原因であろうと怒ったというのは、まことに珍らしい話だ、と考えた。自分が腹を立てたのを広告するとは、もっと驚くべきことだし、なかんずく、賞金を懸ければそうした脅迫がやむなどと、よし一分間でも思ったとしたら、それこそ特筆大書すべきことだ、と考えた。これほど穩健ではないが、もう少し発行部数の多い他の各新聞の社会部長たちは、『オールド・ソプライエティ』新聞の退屈な欄に目を通してゐるうち、例の小記事を読んで、俄

かに興味をおぼえた。

「おや、これは何だ」と『コメット』のスマイルズは驚いて、大きな欵でその記事を切抜き、ザラ紙に貼りつけ、見出しをつけた。

「フィリップ卿に手紙を出したのは誰か？」
後から思いついて——この『コメット』は政府反対派なので——彼は小見出しを作った。きつとその手紙は政府の優柔不斷な政策に飽きた知識階級の選挙民の出したものである、という事をユーモアたっぷりに暗示した小見出しである。

『イヴニング・ワールド』の社会部長は——白髪の紳士で落着き払った動作の持主——は、その小記事を二度入念に読み、注意深く切抜き、もう一度読み直して、それから文鎮の下に入れたが、間もなく全然これについて忘れてしまった。

『メガフォーン』——これは実に明快な新聞なのだ——の社会部長は、読むと途端にその小記事を書抜いて、ペルを押し、記者を呼んで、言わば一息に、二三の指令を簡潔な調子で答えた。

「ポートランド・プレースに行つて、フィリップ・ラモン卿に會つて、この記事について話を取るんだ——なぜ脅迫されたのか、何

と言つて脅迫されたのか、だね。できたら、その手紙を一つ貰つて来るんだ。ラモンに会えなかったら秘書官をつかまえるんだ」

で、柔順な記者は出かけて行つた。

彼は一時間で歸つて来たが、「特ダネ」を手にした新聞記者に特有な、例の不思議な興奮した様子だった。社会部長がすぐ編集長に報告すると、この偉い人物はこう言つた。

「でかした、大でかだ」——というのは最大級の讃辞なのである。

この記者の記事のどこが「でかした」のか、それは翌日の『メガフォーン』に出た半欄を読めばわかるであらう。

閣僚の生命あやうし

外相暗殺の脅迫

「正義の四人」外人引渡し法案阻止を計画
奇々怪々な真相

昨日の『ナショナル・ジャーナル』紙の社会面に現れた、左記の記事は非常な物議を起した。

「外務担当国務大臣（フィリップ・ラモン卿）は、この数週間、明かに一つの筋から出て同一人物の書いた脅迫文を、ひっきりなし

に受取つていた。その性質上、これらの手紙をば、陛下の政府の外務担当国務大臣は無視し得ないと考え、これらの匿名の手紙の作者の逮捕投獄の手びきになるような情報を提供する個人、乃至は数人に、五十ポンドの賞金を出すと提議した。勿論、当の作者は除かれる。」

どの政治家でも外交官でも、匿名の脅迫状など、毎日受取つてゐるのが通例であるから、この発表は極めて異常なことと見て、当『日刊メガフォーン』社はこの異常な処置について直ちに調査を開始した。

本紙の一記者がフィリップ・ラモン卿の邸を訪ねた所、卿は極めて好意的に面会を承諾した。

「この処置は確かに異例です」と偉大な外相は語つた。「しかし、これは内閣の全閣僚の一致した共鳴を得てからきめたものなのです。この脅迫の背後には何物かが存在すると信じる理由があるからで、また序手にお話すると、この件はすでに何週間か前に警察の手にゆだねてあるのです。

「ここにその一通があります」フィリップ卿は手提げ鞆から一枚の外国産の便箋を取出

し、快く本紙記者にその写しを作ることを許した。

それには日付けがなく、その筆蹟はラテン系民族の特徴である飾りの多い女性的なものであったが、文は立派な英語であつた。

文面は次の通り。

閣下——

閣下が法令化なさろうとなさつておいで
の法案は正義に背反するものであります。
それは、独裁者や暴君の迫害をのが
れて英国を避難所としている人々をば、
腐敗した復讐的な政府に引渡そうとして
計画するものです。英国では、この法案
の真価に対して与論は二つにわかれ、
「外国人政治違反法案」を通過させるの
には、閣下の勢力が、閣下の勢力のみ
が、これを可能にするになつてゐる
のを、われわれは知つてゐます。

故に、閣下の内閣がこの法案を撤回な
さらない限り、迷惑ながら閣下は、また
閣下のみならず、正義に反するこの処置
を立法化しようとする者はすべて、除か
なければならなくなるのです。

（署名） 正義の四人

「ここに言う法案とは」フィリップ卿は言葉をつづけた。「勿論、外人（政治違反者）引渡し法案を指しているのですが、これは反対党の戦術さえなければ、この前の会期中に静かに通過していたかも知れない所なのです」

フィリップ卿は言葉をつづけ、この法案はスペインの王位継承の不安定な状態の結果、立案された、と説明した。

「英国であろうと、どの国であろうと、その国の保障を受けながら、ヨーロッパに動乱を起こさせようとするような煽動家を、保護することは許されないのです。この法案が立てられたのと同時に、同じような法令や布告がヨーロッパの各国でできたのです。事実、前の議会の会期中に、わが国と同時に立法化されるように手配ができていたので、各国ともこうした法令はすでに存在しているのです」

「なぜ、こうした手紙を重要視なさるのですか」と『日刊メガフォン』の記者は質問した。

「わが国の警察と大陸の警察に調べさせた結果、この手紙を書いた人間たちが極めて本気である点が確実になったからなのです。彼らは『正義の四人』と署名しているのですが、集団的には、地上の殆どあらゆる国で知られ

ています。個々に彼らが何者であるかは、われわれには全くわかっていないのだが。正しいか過っているか、彼らは地球上で現在行われている司法制度は不適当だと信じ、自分たちで法律を是正しようと企てているのです。

彼らがセルビアの国王暗殺事件の指導者トロヴィッチ將軍を暗殺したのです。彼らがフランス陸軍の契約者コンラッドを、呼べば警官が百人も集まって来るコンコルド広場で、縛り首にしたのです。詩人で哲学者のエルモン・ル・ブローを、その論法が世界の青年を腐敗させるといって、彼の書齋で射殺したのです」

外相は、それから本紙記者に、この奇怪な四人組の遂行した犯罪の表を手交した。

これらの殺害事件の一つ一つの事実は読者の記憶に新しい所であらうし、また同時に、今日まで——各国の警察がこの『正義の四人』の秘密を厳守していたため——そのどの犯罪もたがいに関係があるとされていなかったことが想起されるに違いない。また、その詳しい事情も、正しく発表されればこの徒党の存在が直ちに暴露されたに相違ないのに、全く一般には今日まで知らされていなかった。

『日刊メガフォン』は、この四人の手になる十六の殺人事件の表をすべて発表できる。

「二年前、ル・ブロー射殺事件の後で、いつもは殆ど完璧な彼らの手配のどこかに手違いができて、四人の一人がクレベール街のル・ブローの家を立ち去る所を刑事の一人に見られ、四人を一網打尽にできると考えた所から、三日間尾行をうけたのです。しまいには、彼は監視されていると知って、脱走を企てた。ついに、ギルドーの或るキャフェに——

パリから警官は尾行して行ったのです——追いつめられた。そして『彼は殺されるまでに、巡查部長を一人と、ほかに巡查を二人射殺しました。彼の人相の写真を撮り、プリントをヨーロッパじゅうに回覧したのですが、それがどこの何者であったか、どこの国籍の人間であったかも、今日に至るまで謎なのです」

「でも、その四人は現在もいるのでしょうか？」

フィリップ卿は肩をすくめた。「もう一人補充したか、欠員のまま続けているか、どちらかでしょうな」と卿は言った。

結論として、外相はこう述べた。

「私がこの事柄を新聞を通じて発表するのは、あなたが私だけではなく、この不気味な勢力の願望に添わない一般の誰でもを目標と

する、この危険の存在を認識してもらいたいが、からなのです。第二の理由は、一般社会が知っている事実を進んでのべれば、法律と秩序の維持に当たっている人々の任務の遂行をたすけ、彼らの警戒によって非合法的行為がこれ以上行われるのを防げると信じるからなのです」

引続いて、スコットランド・ヤードに問合させたが、この問題については、犯罪捜査課が大陸各国の警察の長官と連絡をとっているという事実以上の情報は得られなかった。

次に掲げるのは「正義の四人」の犯した殺人の全部の表と、警察が集め得た犯罪の原因の詳細である。この表の発表について、本紙は幸いに外務当局の許可を与えられた。

ロンドン、一八九九年十月七日——服屋の主人トマス・カトラー、奇怪な情況で死んでいるのを発見さる。検死陪審員の判決は、「一名乃至数名の不詳人物による謀殺」

(警察の確認した殺害理由。カトラーは本名をベントヴィッチといい、相当の資産を有していたが、特に悪質な酷使者のタイプであった。工場法違反で処刑三回。警察の信じる所では、カトラーが婦人使用人に対する待遇と関係のなくもない、別のもっと間接な殺害理

由があったらしい)

リエージュ、一九〇〇年二月二十八日——知事ジャック・エレルマン。歌劇場の帰途、射殺。エレルマンは有名な悪徳者で、死後調査した結果、公金を二十五万フラン近く費消している事が判明。

シアトル(ケンタッキー州)、一九〇〇年十月——判事アンダソン。自室で絞殺死体として発見さる。アンダソンは殺人の容疑で生涯に三度裁判に附せられた。彼はアンダソン対ハラらの紛争でアンダソン一族側の指導者であつた。全部でハラ一族の者七名を殺し、三度起訴され、三度とも「無罪」の判決を受けて釈放さる。この最後の事件の、『シアトル・スター』新聞の主筆を暗殺した廉で起訴された時、彼は買収した陪審員たちと握手し、その判決に祝辞をのべたのが想起されるであらう。

ニューヨーク、一九〇〇年十月三十日——パトリック・ウエルシュ、収賄と公金費消で悪名高い。市の収入役に就任せる事あり。汚名を流した道路舗装企業連合の主動者。『ニューヨーク・ジャーナル新聞』に摘発さる。ウエルシュはロング島の林の中で木につるされた死体として発見さる。当初は自殺と

信じられた。

パリ、一九〇一年三月四日——デパール夫人。窒息死。これも、自殺と見られていたが、ある情報がフランス官憲の手にはいつて真相が知れた。デパール夫人は悪名噴々(きんきん)な「女衛」だった。

パリ、一九〇二年三月四日(ちょうど一年後)——通信大臣ガブリエル・ランファン氏。ブローニエ森で自家用箱馬車の中で射殺。馭者が逮捕されたが、やがて釈放。彼は銃声も主人の叫び声も耳にしなかったと誓言した。当時は雨が降っていて、森は散歩するものもまれだった。

(ここに他の十件が続いていたが、どれも前にのべた所と同様で、トレロヴィッチとル・ブローアの事件も例に洩れない)

* * *

これは疑いもなく大きな記事であつた。編集長は、自分の事務室の椅子で、何度も何度も読みかえして、言った。「大できた」

記者——名前はスミスといった——は、これを読みかえして、自分のやった事の重大性に興奮しながら悦に入つた。

外務大臣は朝の茶を寢床で吸りながら、これを読んで、もしや喋りすぎはしなかったらうか、と渋い顔つきで気づかった。

フランスの警視總監は、『ル・タン紙』に——翻訳して電送して——出たこの記事を読んで、英国人のお喋りが彼の計画を台なしにしたと、口を極めて罵った。

マドリッドでは、太陽広場^{プラサ・デ・ソル}にあるキャプティ・ド・ラ・ペで、マンフレッドは、冷やかな微笑を浮かべながら、しかも皮肉な口調で、これを拾い読みして三人にきかせた——二人は愉快そうに面白がっていたが、もう一人の、顎の厚い顔色の悪い男は、死の恐怖を目にたたえながらきいていた。

第二章 忠実な下院議員たち

誰か——グラッドストーン氏だったろうか？——が、記録に残したことだが、世の中で一番危険で、一番獐狂で、一番怖ろしいのは、気の狂った羊だ、と言っている。同様に、これはわれわれの知っている事だが、世の中には、軽卒な点、愚かしいまでに多弁な点、驚くべきまで不器用な点、何かの理由で脱線してしまった外交官より甚だしいものはいない。

国際会議で、口を慎むように修行し、友好的な列強が狡猾な手口で掘った陥穽の間を用心して縫って歩く教育を受けた人物が、何十年もの実行と教訓を忘れて、極く人間的なことをしてしまう瞬間がある。なぜこんな事になるのか、一般の人々には全然わかっていないが、仲間の精神的な経過を大体説明できる心理の少数者は、こうした平衡失調の行為に、適切な、また納得のいくような原因をみつけているに違いない。

フィリップ・ラモン卿は変った気性の人物

だった。彼が一度決心したらば、この広い世界の何がどうしようと、彼の目的をはばむことはできない。性格の強い、堅実な、顎の角ばった、口の大きい男で、その青い目には、極く無情な犯罪者や、特に有名な將軍たちの目によく見受けられる、例の鋭さが宿っている。その癖、フィリップ・ラモン卿は、殆どの人は彼が物を怖れるなどとは想像もしないのだが、自分がやってのける決心をした任務の結果を怖れていた。

肉体的には豪傑で、精神的には卑怯者というべき人間は何千人もいる。死を物ともしないはずの人間が、個人的な気運でビクビクしている。検死法廷では、毎日、こうした人間の生涯——と死——の物語がきかれる。

外務大臣はこの性質の逆であった。丈夫な、動物的な人間は、ためらうことなく、大臣を腰抜けと評するだろう。何しろ、彼は苦痛を怖れ、死を怖れたのだから。

「もし、この件がそんなに心配になるのだしたら」首相が親切に言った——これは例の『メガフォーン』紙の記事が発表されてから二日目の閣議の席上だった——「この法案を引こめてはどう、結局、会期は、もっと重大な案件があるから充分つづれるし、しかも

会期も終りに近づいているのだから」

同意する声がテーブルの周囲に流れた。

「廃案にする口実はいくらでもある。大変な議案を握り潰さなければならないんだ——ブレイズウェイトの『失業法案』は審議未了になる。国民がそれについて何と言うか、怖ろしい話だ」

「いや、いや！」外相は強く拳でテーブルを叩いた。「是非、通過させます。その点、私は決心している。われわれはスペイン国会の信頼を破っているし、フランスの信頼を破っている。私はこの法案の通過を約束した——ですから、われわれは是非ともやり遂げなければいけないのです。よしんば『正義の』人間が一千あると、脅迫が一千あると」

首相は両肩をすくめた。

「こういう事を言って相すまないが、ラモン」と法務次官のボールトンが言った。「あんなふうに新聞に詳しい点を話したのは、いささか軽卒だった、と私は感じざるを得ない。いかにも、あの件に関して、われわれは、君の好きなようにするべきだという一致した意見だった。しかし、何となく、私は君があんなふうに——何と言ったらいいかな

——率直に言うとは考えなかったのだ」

「あの件に関する私の裁量は、ジョージ卿、批評して貰いたくないのです」ラモンは頑固に答えた。

その後で、若々しく見える大蔵大臣とバレス広場を横切つて歩きながら、法務次官殿はこの拒絶を腹にすえかねて、だしぬけに、「馬鹿な野郎だ」と言つた。で、英国の財政の若々しい保護者は微笑した。

「正当な事を言えば」彼は言つた。「ラモンは怯え切っているんですね。『正義の四人』の話はどここのクラブでも持ち切りですよ。私が昼食の時にカールトンで会つた或る男の話をきいて、本当に何か怖れなければならぬもののある事を、私は信じ始めました。その男はまことに真剣でしたよ——南アメリカからつい最近歸つて来て、あちらであの連中のやつた事を見たそうなので」

「何をやつたのです？」

「大統領か何か、例の下らん小さい共和国の一つなんです……八ヶ月ほど前のこと——例の表に出ています——あの連中が縛り首にしました……聴くだけに奇妙な話なんです。彼らは夜の夜中に、その男を寢床から引っぱり出し、猿ぐつわをはめ、目隠しをし

て、国立の刑務所につれて行き、正式に中に入れてもらつて、公けの絞首台にかけて殺して——逃げてしまったのです！」

法務次官殿は、その手続きに有り得がたい点をみつけ、もつと詳しくきこうとしたが、途端に次官が大蔵大臣を引きとめ、つれて行つてしまった。「馬鹿馬鹿しい」と法務次官は不機嫌な口調で言つた。

外務大臣の馬車が議会に通じる道に並んでいた群集の間を通り抜ける時、喝采の聲があつた。彼はちつとも嬉しくなかつた。人気が彼は全く望んでいなかったのである。本能的に彼は、今の喝采は民衆が彼の危難を察知しているのだと見てとつた。こうわかると、ゾツとして、不愉快になった。民衆がこの不思議な四人の存在を嘲っているのだと考えられたら、彼は喜んだであらう——「民衆はあの連中の考えを拒否した」と考えることができたなら、彼は少しは気が楽になつたに違いない。

なぜなら、人気とか不人気とかを本質的要素とは考えないにしろ、群集の動物本能に対しては、彼は固い信頼を置いていたからだ。彼は議会の控室で自分の党の熱心な連中の群にかこまれていた。あるものは冷やかしの